

令和4年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川小学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日 令和4年4月19日(火)

3 対象学年 女川小学校第6学年児童28名 当日実施児童27名 後日実施児童1名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語，算数，理科
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	国語	算数	理科
宮城県	同程度の数値である。(≒)	やや下回っている(▼)	同程度の数値である。(≒)
全 国	同程度の数値である。(≒)	かなり下回っている(▼)	やや下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「思考力・判断力・表現力」における「A話すこと・聞くこと」が宮城県，全国平均と比較して上回っている。また、「B書くこと」についても宮城県，全国平均と比較して上回っている。
- ・「A話すこと・聞くこと」においては，日頃から話すポイントや聞くポイントを押さえて指導していることから，話す力や聞き取る力が身に付いていることが伺える。また、「B書くこと」においては，文章全体の構成や書き表し方などに着目して，文や文章を整えていることが成果につながっていると考えられる。

(課題)

- ・「知識・技能」における「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」が宮城県，全国平均と比較して下回っている。その結果から「知識・技能」全体についても宮城県，全国平均を下回っているのだと考えられる。
- ・「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」における漢字を書く問題においては，正答数が全国平均より下回っている。
- ・問題形式別では，「短答式」「記述式」の問題が宮城県，全国平均と比較して下回っている。

②指導改善のポイント

- ・「知識及び技能」における漢字指導については、これまでどおり、反復して取り組むことを継続する。
- ・「記述式」の問題については、本文から必要な情報を見付け、引用するといった情報活用能力を伸ばす力を身に付けさせる必要がある。そのために、教科書の文章をすらすら音読することができるとともに、自分の考えについて教科書などの本文を根拠に説明する活動を取り入れるようにする。
- ・「読むこと」では、目的に応じて、文章と図表とを結び付けて必要な情報を見付けたり、目的を意識して中心となる語や文を見付けて要約したりすることに課題が見られることから、以下の力を養う指導を工夫する。

- 1) 設問を正しく読み取る力
- 2) 設問に合う情報を本文から抜き出す力
- 3) 本文から抜き出した情報を文章にまとめる力

また、日頃の学習の書く活動においてもこれらの力を意識し、指導にあたる必要がある。具体的には、学習の振り返りを行う際に本時の学習のキーワードを与え、文章にまとめさせたり、国語科や社会科の学習で必要な情報がどこに書いているのか探し、抜き出させたりすることについて指導を積み重ねていく必要がある。

③質問紙から

- ・国語の学習に対する興味・関心等について、約4割の児童が「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」と否定的な回答をしている。また、学校における国語の学習について否定的な回答をしている児童が、宮城県、全国平均と比べて高い数値となっている。一方で、国語の学習に必要感も持っている児童は、9割以上見られた。これらから、国語の学習は大切であると必要感を持っているものの、それらが学習意欲につながらずに約3割の児童が「国語の授業が分からない」という結果につながったと考えられる。
- ・児童質問紙の結果と問題別調査の結果を比べると、児童の意識に反して、平均正答率は、全国平均と同等の数値となっている。今後、児童にこの結果をフィードバックし、日頃の学習が確かな学力につながっていることをメタ認知させ、興味・関心の向上につなげていきたい。

(2) 算数の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「A数と計算」が全国平均には届かなかったが、宮城県平均と比較すると上回っている。

(課題)

- ・「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」とともに県平均、全国平均ともに下回っている。特に「思考力、判断力、表現力等」については、全国平均と比べると大きな開きが見られる。
- ・「B図形」の領域の平均正答率は、全国平均を大きく下回っている。「B図形」の問題では、プログラミング的思考力を問う、問題が出題されており、今後、プログラミング的思考力を育む指導を、より意識して指導していく必要がある。

②指導改善のポイント

- ・「知識及び技能」の中でも「学習指導要領 解説 算数科 第5学年C(3)」において百分率を用いた表し方を理解し、割合を求めることに課題が見られる。割合については日常生活でも活用されている場面が多くある内容である。そのため、日常生活とのつながりに気付かせ、そのうえで割合についての理解を深められるようにしたい。そして、改めて計算方法について学び直しをさせたい。
- ・「B図形」の領域の問題では、示されたプログラムについて、正三角形をかくことができる正しいプログラムにかき直す問題が全国平均と大きな開きが見られた。正三角形の意味や性質について、復習するとともにプログラミング的思考力を養う指導も今後必要である。

③質問紙から

- ・算数に対して、「好きだ」と感じている児童が全体の6割程度に留まる。また、算数の授業がよくわかると感じている児童も全体の6割程度である。このことから、算数の勉強は大切だと感じているにも関わらず、算数の授業で問題が分からず、苦手意識が強くなっている児童が多いことが分かる。そのため、まずは児童が「わかった」「できた」と感じる授業づくりを行っていくことが大切である。
- ・算数の問題の解き方が分からないとき、諦めてしまうと回答している児童が全体の5割以上見られる。この質問については、全国・県平均とともに開きが見られる。児童に粘り強く取り組む姿勢を養うためにも、難しい問題に挑戦させ、「できた」と達成感を得られるような場を設定したい。

(3) 理科の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「エネルギー」を柱とする領域が全国・県平均よりやや上回っている。

(課題)

- ・「思考・判断・表現」の観点、全国平均をやや下回っている。
- ・学習指導要領の区分・領域B区分(「生命」を柱とする領域、「地球」を柱とする領域)が特に県平均、全国平均を下回っている。
- ・記述式の問題では、数名の児童が無回答となっている。

②指導改善のポイント

- ・日頃の学習指導の中において課題解決型の授業を中心に行う。特に、学習問題について見通しをもつ活動や、実験結果を踏まえて分析する活動を多く取り入れていく。
- ・学習指導要領の区分・領域B区分は、昆虫の体のつくりや地層のつくりなど観察が多くなる単元構成となっている。観察する際に、何に気を付けて観察するのかといった見方や観察したものをどのように分類し、一般化するかといった考え方を高める指導を工夫していく。
- ・記述式の問題においては、何を書けば良いのかというよりも、どのように書けば良いかわからないという児童が多いように感じる。そのため、観察・実験したことを考察する活動において、一定の型を示すことで、書き方を身に付けさせていきたい。

③質問紙から

・理科の学習が「好きではない」と回答している児童が、4割以上いる。理科の学習において文部科学省から示されている「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生マニュアル」では、児童同士が近距離で活動する実験や観察は感染のリスクが高い学習活動として示されている。そのこともあり、本校では、児童同士が近距離で行う実験や観察を行わず、教師が模範実験をしたり、動画資料を使ったりして指導を行ってきた。

その結果、児童にとって「受け身」の学習となってしまったのだと考えられる。今後は、感染症の状況を見つつ、積極的に実験や観察の活動を取り入れ、児童にとって楽しい理科の授業づくりを目指していきたい。

7 児童質問紙調査結果から（○成果、▲課題）

（1）生活習慣・学習習慣について

○ほぼすべての児童が朝食を毎日食べている。

○8割以上の児童が毎日同じくらいの時刻に就寝・起床している。

▲携帯電話・スマートフォンやコンピューターの使い方について、約束がない児童が全国・県平均より多く、全体の2割程度いる。

（2）規範意識・自己有用感について

▲自分には、良いところがあると思っていない児童が、学級の5割程度である。全国・県平均と比較するとかなり下回っている。

▲難しいことでも失敗を恐れずに挑戦していると回答している児童が全体の6割程度である。全国平均と比較すると、消極的な児童が多いように思える。特に「当てはまる」と自信を持って回答している児童は、全国・県平均とかなりの開きが見られる。

○9割近くの児童が「いじめは、どんな理由があってもいけないことである」と理解することができている。

○9割近くの児童が自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていると回答している。

8 今後の取組

（1）「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

①児童が「何がわかったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の充実

・宮城県教育委員会から示されている「学力の向上に向けた5つの提言」を引き続き、全学級で確実に取り入れることにより、児童の自己有用感を高めたり、基礎学力の定着を図ったりする。

・校内研究において教師の指導力の向上を図るとともに、児童の目指す姿の共通理解を図り、教職員が一丸となって学力の向上に取り組む。

②個に応じた学習指導の充実

・タブレット端末やA I型学習教材（キュビナ）を活用し、繰り返し学習に取り組ませたり、下の学年にさかのぼって学習に取り組ませたりするなど、個に応じた学習を充実させる。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

① 基本的な生活習慣の確立

- ・生活習慣の改善を図るために「うみねこルール」（基本的な生活習慣を身に付けさせるため、児童会で定めた約束事）を全校児童で常時意識化させるとともに、情報モラル教室など外部講師による学習会をPTA行事で行うなど家庭に対しても働きかけていく。
- ・「スマイルタイム」（健康や生活習慣を確立するために、養護教諭が中心となって指導にあたる時間）を毎月設け、児童の基本的な生活習慣を確立させるとともに、その様子を保健だよりや学校ホームページで発信し、家庭に対しても、啓発していく。

② 自己有用感の涵養

- ・「キャリアパスポート」を活用し、自分の得意なことや夢について自己認知する機会を設けるとともに、各学校行事などにおいて児童の成長を認め、励ますことを通して、児童の自己有用感を高めていく。
- ・高学年では、学校の中心として委員会活動や縦割り活動、各学校行事などにおいて活躍する場を設定し、保護者、教職員、地域の方々から認められ、褒められるような機会を設ける。

③ 家庭学習習慣の定着

- ・家庭学習の課題は、授業と関連付け、予習的な課題や復習的な課題、活用的な課題など児童の実態や、単元の進捗状況などを踏まえた内容とする。
- ・家庭学習においても個に応じたものとするために、自分の興味のある内容や苦手としている内容など児童が自分で選択して取り組むことのできる課題を設定する。

(3) 女川中学校、女川向学館、地域との連携強化

① 中学校との連携

- ・校内研究の主題や副題、目指す児童・生徒像を小学校・中学校で共通のものとするすることで、9年間を見通した指導を行う。また、定期的に小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うことで各教科の指導においても9年間を系統立てて指導する。
- ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行う。

② 女川向学館との連携

- ・本校では、高学年において主に算数科の補充学習を月1～2回程度行っている。その時間に女川向学館の職員に來校していただき、学習支援を行う。
- ・女川町教育委員会生涯学習係で運営している「おながわ放課後楽校」において、各学年の担任と情報交換を行い、補充学習を中心とした学習支援を行う。
- ・各種検定において、女川向学館に実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③ 地域人材の活用

- ・女川町教育委員会生涯学習係で作成した「女川小学校版人材バンク」や「出前授業」を活用することにより、地域の教育力を生かす。
- ・女川町教育委員会生涯学習係との連携を深め、「家読の日」の啓発を行い、「読解力」を身に付けさせる手立てとする。